

特集 精神科専門医取得のための研修にかかわる問題点

精神科専門医取得のための研修にかかわる問題点

森 隆夫

筆者が専門医制度に最初に関わったのは、日本精神神経学会が本格的に専門医制度の設置を前向きに考え始めた平成12年の専門医準備委員会であった。平成14年には専門医特別委員会と名称が変更され議論を重ねた。平成17年に移行措置が始まり、本年(平成22年)新規の第一回試験が無事終了したことは、極めて感慨深いものがある。

平成17年当初、移行措置が始まる際にも会員からは賛否両論が聞かれ、質問が絶えない状態であった。それは「なぜこの専門医制度ができたのか」、「どのような意味があるのか」といったことが正確に伝わっていなかったからである。精神科専門医制度の設置は、教育面からみた正論のみならず、医師研修システムの改変や医療政策上の観点さらには社会的な情勢変化なども絡んだ複合的状况から判断された結果である。そのため、議論を重ねた委員個々でも解釈には若干の温度差があり、誰もが納得する容易な説明は困難であったのだと思う。このことは、10年以上経過した現在でもあまり変わりはないだろう。もし、そうだとすれば、「指導医として指導する際に問題は起きないのだろうか」という疑問も生じてくる。

兎も角も、精神科専門医制度はスタートした。そして、それぞれの医療機関で研修(いわゆる後期研修)が始まった。そこではさまざまな現実的な問題点が少しずつ明確になりつつある。それらを通して、近い将来「専門医のあり方」について

の本格的な議論が起こることを期待したい。われわれは、この精神科専門医制度が誤った方向に向かないよう常に互いの意見を交換し、軌道修正を繰り返していく必要がある。本シンポジウムでは、その第一歩として、大学病院の医師、公立病院の医師、民間病院の医師そして受験を体験した医師それぞれの立場から具体的な問題点を指摘してもらい討論した。

小島卓也先生は、専門医研修の内容、試験の申請および試験の内容などの概略を解説した。そして、申請に際しては研修手帳の購入と開始の登録を徹底して欲しいこと、ホームページのQ&Aを常に点検する必要があることを伝えた。

続く矢部博興先生は、大学病院での研修のメリットとデメリットを示した。そして、最大のメリットは「指導する医師が屋根瓦方式で指導できる点」であることを挙げ、医師不足が最大の懸念材料であることを示した。

川副泰成先生は、自治体単科病院およびいわゆる総合病院精神科へのアンケートを中心に論を展開し、それぞれ得意な領域や不得意な領域あるいは指導しにくい領域があることから、互いに連携・補完していく必要性について言及した。

山口成良先生は、自院での研修医がドロップアウトした経験から得た具体的な改善策を紹介し、専門医制度について研修手帳が網羅的で年次ごとの目標がないことや臨床家を目指さない医師への対応など、いくつかの問題点を提示した。

第106回日本精神神経学会総会=会期：2010年5月20~22日、会場：広島国際会議場・アステールプラザ

総会基本テーマ：求められる精神医学の将来ビジョン：多様な領域の連携と統合

シンポジウム 精神科専門医取得のための研修にかかわる問題点 座長：森 隆夫(医療法人愛精会あいせい紀年病院)、小島 卓也(医療法人社団輔仁会大宮厚生病院) コーディネーター：森 隆夫

最後に中野和歌子先生は、第一回新規試験の体験者（合格者）という視点から、研修の問題点について解説し、指導医の署名欄が極めて多いことや研修に関わる情報の伝達が十分に行われていないことなどを指摘した。

総合討論では、不合格になった受験者に関わる質問や「専門医のメリットは何かと聞かれた際どのように答えたらよいのか」などといった具体的な質問もあり、時間は限られていたが丁寧な討論

が展開された。

今後、今回のシンポジウムで議論された内容を踏まえ、関連する委員会で修正すべき点を修正し、より魅力ある専門医研修となるよう努力する必要があるだろう。ところで、本シンポジウム会場には空席が目立ち、「専門医の更新や自身の知識の吸収には興味があるが、若い医師を育てる専門医研修に対する関心が薄いのではないか」という問題点が垣間見えたのは残念であった。